

大川 宇八郎

明治十三年（一八八〇）年、岩手県
 人大川宇八郎 *翁が最初の *和人と
 してこの地に定住し、多くの *入植者
 を助け開拓の祖として *敬慕された。

（大川宇八郎顕彰碑 *碑文より）

宇八郎は、一八五五年、岩手県
 九戸郡軽米（現在の岩手県軽米町）で酒屋の長男と
 して生まれました。



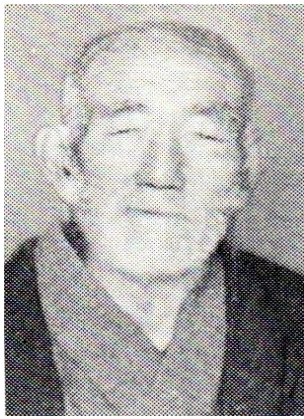
「大川宇八郎顕彰碑 碑文」〔音更町〕

「北海道へ移住しよう」と決めたのは、宇八郎の
 家の酒屋が、とう産したことと、北海道に大きなゆ
 めをもったからでした。

一八七七年、宇八郎は、日高へわたり、一八七八
 年、サツテキオトフケ（現在の音更町下士幌）にう
 つり住みました。日高から山をこえてやってきた宇
 八郎は、十勝で強い力をもっていた有力者の家をと
 ずね、「新しい土地で、アイヌの人たちとともに、生
 活をしながら商売をしたい」と話しました。次の日
 から、宇八郎は、アイヌの人の家々を回り、毛皮を

ゆずってもらうかわりに、塩、油、日用ぎつ貨品な
 どをあげました。毛皮が集まると、十勝川を舟で下
 り大津（現在の豊頃町大津）に行つて売りました。
 宇八郎は、けっしてあくどい商売をしなかったた
 め、しだいにアイヌの人たちからの信用が高まり、
 宇八郎のもとには多くの毛皮が集まるようになりま
 した。大雪で多くのシカが死に、ほかの毛皮商人も
 商売にならなくなつて十勝からいなくなりましたが、
 宇八郎のところにはいつものように毛皮が山のように
 集まりました。

一八八三年、宇八郎は、コタンの有力者の娘ヨイ
 カサンと結こんしました。これによつて、宇八郎と
 アイヌの人との仲はいっそうよくなり、宇八郎の家
 には、いつもアイヌの人たちが何人も住みこむよう
 になりました。このころから、宇八郎は、農業や、
 馬と牛などを飼育することに力を注ぎ、サツテキオ
 トフケを中心に山野を切り開いて農地にしました。
 バッタの大発生や大こう水がおそつた十勝でした
 が、ゆたかな大地を目指し入植者が次々とふえてい
 きました。宇八郎は、入植者に、作物の種をあたえ



〔音更町所蔵〕

たり、馬や農具の使い方を教えたりしました。病人が出てこまっている家のことを聞けば、馬と農具を持って出かけ、畑をたがやして回りました。

こうして、宇八郎の人望は高まり、同時に、農場の方も発てんしていきました。最せい期には馬百五十頭、牛八十頭を飼育する大牧場となりました。

こうした宇八郎には、*公職の話が持ちこまれることもありましたが、「そんな堅苦しいことはきらいなしよう分なでなあ。協力してくれというなら、どんなことでも協力するが公職だけはごめんだ」と言っつてきよひし続つけました。しかし、宇八郎をたよって来る人たちは年ごとにふえ、「食べる物がなくて」とやっつてくれば、「イナキビがあつたろう」と分けてやるし、「金がなくて」と頭を下げしてくれば「少しくらいなら」とあげていました。そうすることで、二十

八万二千三百坪つばもあつた農場も、少しずつ面積めんせきをへらし、馬や牛の数がへつつてきました。一九二六年ころになると馬や牛はもとよ

り、農場のほとんどが人手にわたつていきました。「人様にうらまれるようなことを何一つしなかったことが、せめてものわたしのほこりとするところだ」と言い残し、一九三七年十一月、宇八郎は、愛し続けた音更の土にかえつたのでした。

*翁：・男の老人のこと

*和人：・アイヌの人たちとそうでない日本人を

区別くべつさせるために用いた言葉

*入植者：・開たくのためにうつり住んだ人のこと

*敬慕：・うやまい、したうこと

*碑文：・石碑にほりつけた文章

*公職：・町会議員などの職のこと

◎ 宇八郎が、自分のさいさんをへらしてまで、こまっている人を助けたのは、なぜだろうか。

◆ あなたは、だれに対しても分けへだてしないで、公平こうへいにしようとしていますか。また、公平であるためには、どのような気持ちで生活することが大切だと思いますか。